

磐崎弘貞／井出里咲子／小野雄一（編）
IWASAKI Hirosada／IDE Risako／ONO Yuichi (Eds.)

「留学生を活用した異文化交流型コミュニケーション活動プロジェクト」報告書

1. プロジェクト計画の概要

本プロジェクトは、本学における平成 26 年度「革新的な教育プロジェクト支援経費」に採択され、グローバルコミュニケーション教育センター発足の外国語センターにおいて、以下の体制で実施したものである。

代 表 者：外国語センター長 浜名恵美

実施責任者：外国語センター 磐崎弘貞

予 算：348,000 円

概要

外国語センター開設の英語科目（1・2 年生向け両方）の担当教員から、授業内容と関連して留学生の授業参加（1 回～数回、あるいは学期全体）を希望する教員を募り、その時間帯で授業参加が可能な留学生（学部生、院生）を短期雇用する。担当教員との打ち合わせを経て、異文化を背景とする留学生が討論・プレゼンテーションに参加することで、日本人学習者の異文化理解およびコミュニケーション能力の育成を計り、国際交流の橋渡しとしても機能させることを目的とする。

目的

- (1) 留学生が参加する授業においては、異文化によるコミュニケーションの壁を体験し、それを克服するグローバルなスキルを身につけてもらう。
- (2) 異なる文化背景を持つ留学生に対して英語を使用することで、日常化している概念や文化を説明する総合的なスキルを向上させる。
- (3) 1 つの概念や意見を異なる表現で理解してもらうためのパラフレーズ能力を育成する必要性に気付くと共に、そのスキルを磨くことができる。
- (4) 英語圏のみならず、非英語圏の留学生が参加することで、英語使用に関する心理的不安を下げることでコミュニケーション活動を活発化させる。

期待される教育効果

- (1) 英語圏のみならず、非英語圏の留学生と英語で活動することで、世界共通語と

しての英語の役割を再認識することができる。

- (2) 留学生についても、日本人学生との交流機会が増えることで、孤立的な学習環境から抜け出し、日本及び日本人をよりよく理解する貴重な機会となる。

実施計画

7月～9月：外国語センターで授業担当する教員全員に対して、留学生を活用した授業の要望があるかどうかを調査する。これを具体的な日程、1授業における希望人数（1名～複数名）、回数（1回～数回；学期全体）で申請してもらい、それに基づいて留学生（学部生および院生）に対して参加希望者を募る。

10月～3月：希望する授業において、担当教員との事前打ち合わせのもと、留学生にプレゼンテーション、討論等に参加してもらう。学期末においては、参加したクラスについて、日本人受講生及び参加した留学生に対して、本活動についての感想・改善点などを書いてもらうアンケートを実施する。特に、顕著な効果をもたらしたと思われるクラスにおいては、その活動内容を報告してもらう。

対象となるクラス：外国語センター英語授業（全て）（英語によるグループワーク、意見交換等への参加）

対象となる留学生：本学の留学生（学部生・大学院生；国籍は問わない）

クラスでの使用言語：英語

謝金：1授業への参加につき、準備等を含め1.5時間分の謝金（本学規定額）の支払い

点検・評価方法

- (1) 本プロジェクトに参加する教員、留学生、受講生に対して、本活動に対してのアンケートを実施して、実施回数を含めて効果や改善点を調査する。
- (2) 実施クラスにおいては、実際の授業活動内容を報告してもらい、第三者に対してそれを可視化し、かつ、今後の募集時にも役立てる。

特色

- (1) 異なる文化を背負う留学生に対して、日本人学生が異文化体験のシミュレーションが可能となる。
- (2) 今後、日本人学生の留学に対する意欲を高めることが期待される。
- (3) 留学生においては、親日感情を高める事が期待される。

支援終了後の継続

- (1) プロジェクトリーダーを中心に、今回の活動結果を英語担当者に周知し、次年度以降、留学生との交流をシラバスに組み込むことを各担当者に検討してもらう。
- (2) TAに日本人だけではなく留学生院生を雇用する機会を増やすことを検討する。
- (3) 学部留学生を本プロジェクトと同様に短期雇用する機会を設ける。

2. 実施状況

前述の計画の下、以下の要領でプロジェクトは実施された。

まず、2014年9月～10月において、外国語センターで授業担当する教員全員に対して、留学生を活用した授業の要望があるかどうかを調査し、具体的な日程、1授業における希望人数（1名～複数名）、回数（1回～数回；学期全体）で申請を受け付けた。その結果、6名の教員から申請があり秋学期に実施することとなった。本プロジェクトに参加したのは以下の教員である（敬称略）。

浜名恵美、磐崎弘貞、井出里咲子、高木智世、小野雄一、吉原ゆかり
同時に、短期雇用として参加可能な留学生を掲示およびオンラインで募集し、時間割調整の結果、約20名の留学生が参加することとなった。

2014年10月～2015年2月において、担当教員との打ち合わせのもと、留学生が英語授業に参加し、プレゼンテーション、討論等に加わった。参加人数は、1名から8名程度まで多様であった。クラスによっては、日本人学生がグループで留学生に対して文化や言語など特定のトピックでプレゼンを行い、留学生も母国について同様のプレゼンを行い、お互いに意見の交換を行った。学期末においては、特に留生活活用の機会が多かったクラスについて、本活動についてのアンケートを実施した。

3. 活動例

各授業での活動は様々な形態であったが、記録として、その活動内容のいくつかを紹介したい。

活動例1：日本語諺から日本文化を見る

これは日本語諺の英語直訳の一部を空欄とし、日本人学生がその意味を英語で説明し、留学生に、空欄に何が入るかをクイズ形式で推測してもらうものである。たとえば、以下は「猫に小判」を題材として、日本人学生が留学生にクイズ形式で出題しているやりとりである。

Japanese Student (to overseas students): This is a Japanese proverb which means “Something valuable may be quite useless for someone else.” What do you think the blank is?

Japanese Proverb: It’s like a gold to a ().

Meaning: Something valuable may be useless for someone else

Overseas student: Well, I don’t know. Maybe “rock”? No? (laugh) OK, is it “pig”? Because I hear there is an English proverb “Casting pearls before swine.”

JS: Good thinking, but no (laugh). In Japanese, it’s a “cat.” But you are right. There is an English proverb “Pearls before swine” and we also have the proverb “*Buta ni shinju.*” It means exactly the same.

OS: Actually, we have a similar proverb in our language, too.

こうした活動により、クイズ出題を通してコミュニケーション手法を学びながら、相互の諺から文化を見るタスクになっている。多くの場合、表現こそ違うが、日英語で同様の発想が見られるほか、他の言語でも同様の表現が見られのが面白い点である。以下、同様のクイズ形式で日本人学生が出題した諺の一部である（実際の出題では括弧内が空欄になっている）。

(1) 十人十色

直 訳 : Ten people, ten (colors)

意 味 : Everyone has his or her own taste.

英語諺 : There is no accounting for taste. / So many men, so many minds.

(2) 井の中の蛙

直 訳 : A (frog) in a well

意 味 : A person who does not know much about the world

英語諺 : a big fish in a little pond / He that stays in the valley shall never get over the hill .

(3) 壁に耳あり障子に目あり

直 訳 : Ears on the wall, (eyes) on the sliding paper door.

意 味 : You never know who is watching or listening.

英語諺 : Walls have ears.

活動例 2 : 表意文字である漢字を説明する

これは、漢字の各パーツの意味から、その漢字全体の意味を推測してもらうもので、やはりクイズ形式で行われている。たとえば、以下は「媯」の意味を推測してもらうタスクでのやり取りである。

Japanese Student (to overseas students): You know “男” means “man,” right? In this kanji, a field (田) and power (力) are combined, so “power in a field” is “man.” OK, I’ll ask you about another kanji. This consists of three parts. In the middle is the kanji for “woman” and it’s between the two same kanji characters of “men.” So it’s one woman between two men. What do you think this means?

媯

Overseas student: I’m not sure. Is it “love”? Maybe two men love the same woman, so is it “eternal triangle”? (註 : eternal triangle とは「三角関係」のこと)

JS: No. Any other idea? No? OK, this kanji means “teasing.” This shows that two men are teasing a woman.

OS: Oh, “teasing,” not “eternal triangle.” (laugh)

ここでは、外国人がしばしば興味を持つ漢字を題材に、そのパーツの意味から漢字全体の意味を推測するゲームとなっている。ちょっとしたコミュニケーションのトピック題材になるとともに、日本語文字体系への導入にもなる。その他、「姦^{かま}（しい）」(=noisy)、「髮」(=hair)なども使われている。

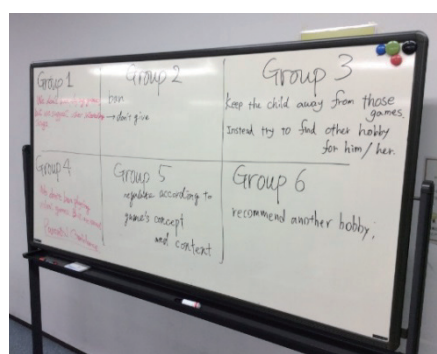
活動例3：ディベート的活動としてのディスカッション

あらかじめリーディング教材として賛否両論があるトピックを読み、それについて議論を行う活動である。たとえば「死刑について」を扱った際には、以下のような活動手順となっている。

- (1) 課題として「死刑」の賛否両論を含む英文を日本人学生および留学生に与える。
- (2) **Worksheet** を利用して内容の **Q&A**、およびキーワードに関する小テストを実施。
- (3) グループごとに分かれてテーマに従ったディスカッションを行う。留学生には、できるだけ全員に発言させるように依頼。
- (4) グループの代表によるプレゼンテーションを行う。その際、ホワイトボードにキーワードなどを書くように指示。
- (5) 各自が **Learning Management System (LMS)** にサマリー・エッセイを書く。



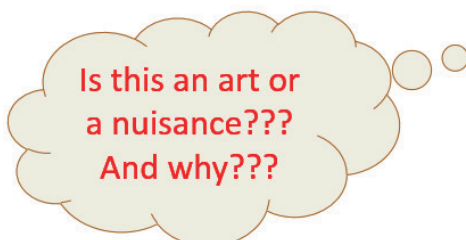
グループディスカッションの様子



ホワイトボードに書かれたキーワード

他には、「ビデオゲームの検閲」「『病は気から』は本当か」「暴力的テレビゲームは悪影響を及ぼすか」「オーストラリア、シドニーの落書き対策」「オーストラリアの妊婦バスケットボール禁止法を巡って」「日本の捕鯨」といったトピックが扱われている。

Today's Discussion Topic



「落書き対策」についての発表で用いられたスライド例

活動例 4 : 協同学習でのパンフレット作り

Japan / Tsukuba in One Page という課題を事前に出し、A4 用紙 1 枚に、つくば市もしくは日本の紹介をするパンフレットを受講生全員に作成してもらった。授業当日、1つのグループに留学生 1 人を割り当て、受講生はそれを見せながら説明し、留学生はそれに対する質問をするというやりとりをした。最後にそのパンフレットは留学生に記念として持ち帰ってもらった。

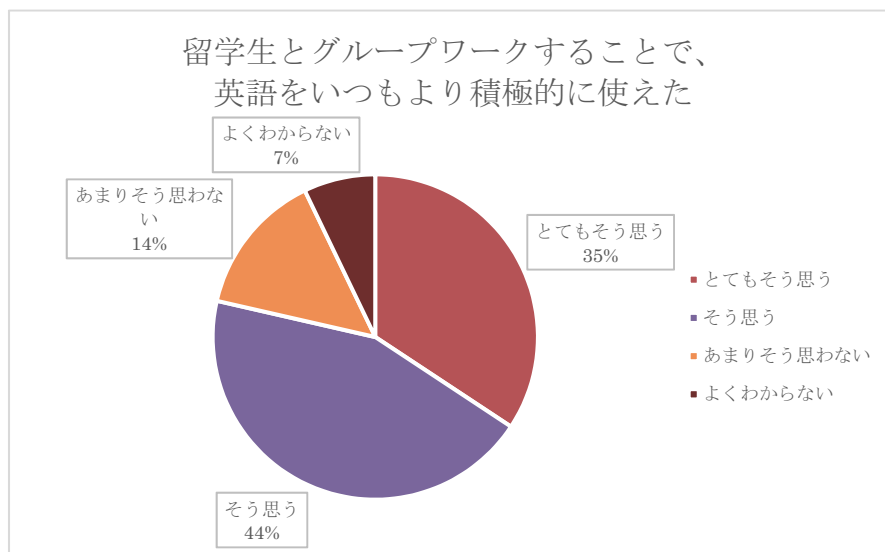
これにより、異文化を持つ人たちに訴えるものは何かを考えたいうえで、それをいかにわかりやすく相手に伝えるかの練習を行った。また、留学生からは、予期せぬ質問がなされ、文化の違いを認識するとともに、それを発信するスキルの重要性の認識にもつながっている。

4. 評価と成果

本プロジェクトの実施は、クラスによって、実施期間・回数、参加留学生数などに大きな差があったが、日本人学生、留学生、教員にとっても非常に刺激のある体験となっている。これをいくつかの観点から見ておきたい。

参加日本人学生からの評価

まず、以下は、参加人数が多く、留学生参加が多かったクラスでのアンケート結果の一部である (2 クラス、計 70 名)。



英語使用の積極性に関する回答（対象：70名）

このように、留学生の参加により、約8割の日本人学生が積極的に活動できたとしている。同クラスでは、「留学生が参加する英語の授業を今後履修してみたいと思うか」との問いにも、「とてもそう思う」（27%）、「そう思う」（43%）と、約8割の学生が肯定的な意見を述べている。

次に、参加学生から、同様の回答が多かった具体的なコメントを引用したい。

- ・留学生の出身国の文化や風習、日本とは異なる価値観に触れることができた。
- ・必ずしも英米風ではない、様々な発音が聴けた。
- ・英語で伝えようと必死になることができた、即興で話す練習になった。
- ・他の学生の意見に対する留学生の反応がよい見本となった。
- ・留学生が加わることで、ディスカッション中に日本語を話さなくなり、日本人同士のなれ合いが減った。
- ・自分たちと留学生の英語力の差を痛感した。
- ・流暢な英語に萎縮し、精神的にきつかった。

参加教員からの評価

教師からは、以下のような点が報告されており、その多くは共通した認識となっている。

- ・最初はグループグループディスカッションになれなかった様子だったが、きちんと予習をしておくことで議論がしやすくなるということで、だんだんと雰囲気はよくなっていった。
- ・適度な緊張感のもとで、最初は当惑していたが、8週目あたりになると積極的、か

つ自然にコミュニケーションができるようになった。

- ・通常の授業では、あまり英語を使いたがらない学生も、実際に非日本語話者を相手に英語でコミュニケーションをとるしかないという状況に置かれた場合には、なんとか英語を用いて表現しようと最大限の努力をしていることがわかった。
- ・留学生の参加に刺激され、コースウエアはほぼ全員修了し、付帯効果として、他のコースも自主的に取り組むようになった。
- ・留学生 TA は強い意識をもって **facilitation** を行ってくれた。
- ・留学生は、誠心誠意参加してくれて、クラスの雰囲気をよくしてくれた。日本のことが好きで、日本人学生との交流の場を望んでいる学生が多いことがわかった。

これらをまとめると、具体的な成果としては次の点を挙げることができるであろう。

- (1) 異なる文化を背負う留学生と交流することで、文化的視野を広げるとともに、コミュニケーションの壁も体感し、国際共通語としての英語を再認識することができた。
- (2) 日常化している概念やロジックが必ずしも普遍的ではないことを認識し、そのために英語で説明するスキルを向上させることができた。
- (3) 留学生のほとんどが非英語圏の学生であったため、ほとんどの学生については英語使用に関する心理的不安を程度下げることができ、通常の授業以上にコミュニケーション活動に対して積極的な態度を育成することができた。
- (4) 非英語圏の留学生の英語使用を目の当たりにし、英語学習への意欲が改めて喚起された。

5. おわりに：今後の課題と展望

今回のプロジェクトは、多くの正の効果を生み出したが、同時に問題点・課題も観察することができた。各教員そして事務サイドからの意見を集約すると、問題点は以下の3点に集約できる。

まず第1に、短期雇用を伴うプロジェクトで実施する場合、授業計画、短期雇用申請処理、支払いに関わる実施状況の確認作業など、教員および事務局の事務処理が煩雑となり、これをよりシステム化する必要がある。

2点目として、授業参加に熱心な留学生とそうでない者がおり、特に後者に対するきめ細かな事前指導・打ち合わせが必要である。

3点目として、予算が限定的・流動的な場合、授業スタイルを設定しにくい。すなわち、たとえば、留学生参加が1名の場合と5名の場合、単発的な場合と長期に渡る場合では、授業内容を大きく変える必要が生じる。

こうしたことを踏まえて、今後は、以下の点を検討する必要がある。

まず、第1点目として、実施方法について、特別なプロジェクトではなく、低予算あるいは予算を使わずに、恒常的／長期に渡って、こうした留学生活用の授業を行な

るシステム開発が必要である。これには、日本語を学習する留学生と、英語を学習する日本人学生との授業中または課外での互恵的な学習形態を検討する必要がある。

2点目として、留学生が参加できないときでも、こうした積極的な学習雰囲気を作っていく事が課題と言える。